

おか つ はら

岡津原Ⅲ遺跡

- 平成9年度茶園改植に伴う発掘調査報告書 -

1998

掛川市教育委員会

おか つ はら

岡津原Ⅲ遺跡

-平成9年度茶園改植に伴う発掘調査報告書-

1998

掛川市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成9年7月30日から平成9年10月22日まで実施した、静岡県掛川市岡津字旗差597—1に所在する岡津原Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、岡津原Ⅲ遺跡地内で計画された茶園改植に先立つ緊急の発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査では、土地所有者の服部壽栄氏をはじめ周辺土地所有者には、埋蔵文化財に対し多大なご理解とご協力を頂いた。
4. 発掘調査は、掛川市教育委員会の村松弘規が担当した。
5. 発掘作業ならびに整理作業には、次の方々の参加を得た。

青島信二・山崎辰雄・木村治郎・榎原通伸・荻田俊雄・荻田保・加藤正心
井筒いつよ・西田泰子・山崎美智子・岡本暁美・松浦富美江・松浦まさ子・梅津まさゑ
森内光恵・清光真由美・児玉昌子・大川恵代・白石洋子
6. 本書の編集、執筆は村松が担当した。
7. 発掘調査の業務は、掛川市教育委員会教育長木曾忠義、社会教育課長清水功、文化振興室長長尾秀雄、文化振興係長大川原淳哲のもとに社会教育課が所管した。
8. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 掘図における方位は、磁北を示す。(1997年8月現在)
2. 本書で使用した造構名称は次のとおりである。

S D : 溝状造構 S F : 土壙
S H : 掘立柱建物 S P : 小穴、ピット

目 次

例言・凡例

I	発掘調査と遺跡の概要.....	2
1.	調査に至る経緯と調査の目的	
2.	調査の方法と経過	
3.	遺跡をめぐる環境	
II	調査の内容.....	6
1.	遺構	
2.	遺物	
III	まとめ.....	22

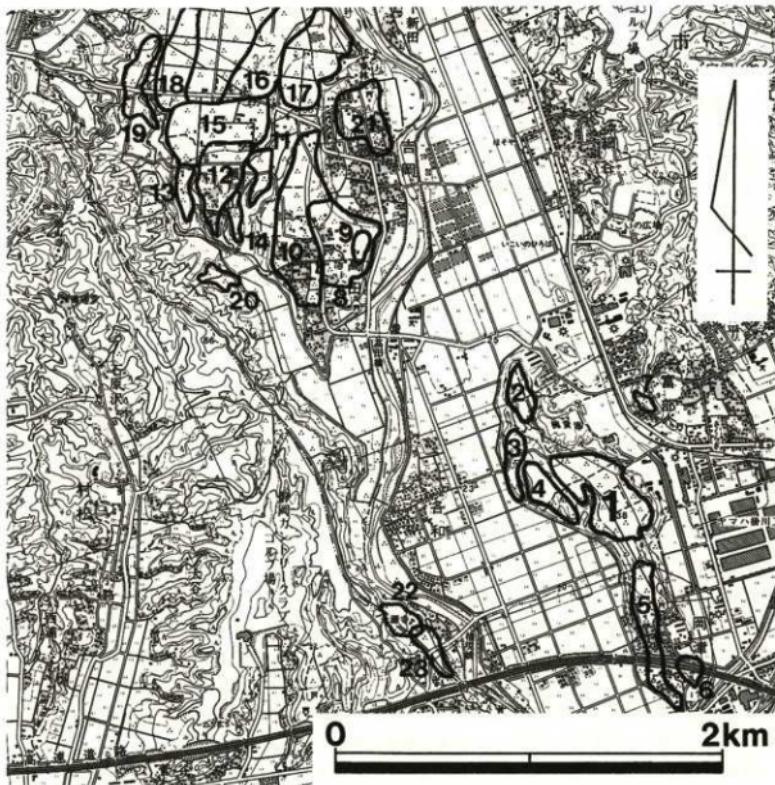
報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置及び周辺遺跡分布図.....	1
第2図	遺跡周辺地形図.....	4
第3図	遺構全体図.....	5
第4図	1号方形周溝墓実測図.....	7
第5図	2号方形周溝墓実測図.....	8
第6図	2号方形周溝墓周溝土層断面図.....	9
第7図	2号方形周溝墓主体部実測図.....	10
第8図	S D02土器出土状況実測図.....	11
第9図	3・4・5号方形周溝墓実測図.....	12
第10図	3・4・5号方形周溝墓周溝土層断面図.....	13
第11図	S D08土器出土状況実測図.....	14
第12図	6・7号方形周溝墓実測図.....	15
第13図	S H01実測図.....	16
第14図	縄文土器出土状況実測図.....	17
第15図	出土遺物実測図(1).....	19
第16図	出土遺物実測図(2).....	20
第17図	方形周溝墓群構成図.....	23

図版目次

- 図版I (上) 前半部完掘状況（空中写真）
(下) 後半部完掘状況（空中写真）
- 図版II (上) 調査前全景（南西から）
(中) 重稼動風景
(下) 作業風景
- 図版III (上) 1・2・3・4号方形周溝墓完掘状況（北から）
(中) 2号方形周溝墓完掘状況（北から）
(下) 3号方形周溝墓完掘状況（東から）
- 図版IV (上) 3・4号方形周溝墓完掘状況（東から）
(中) 5号方形周溝墓完掘状況（北西から）
(下) 6・7号方形周溝墓完掘及び墓道確認状況（東から）
- 図版V (上) 2号方形周溝墓主体部土層断面（北から）
(下) 2号方形周溝墓主体部完掘状況（東から）
- 図版VI (上) S D02土器出土状況（西から）
(中) S D02土器出土状況微細（北から）
(下) S D02土器出土状況微細（南から）
- 図版VII (上) S D04・15完掘状況（西から）
(中) S D08土器出土状況（南から）
(下) S D08土器出土状況微細（東から）
- 図版VIII (上) S H01完掘状況（東から）
(下) 繩文土器出土状況（北東から）
- 図版IX 出土土器1
- 図版X 出土土器2
- 図版XI 出土土器3



1	岡津原Ⅲ	縄文(中)、弥生(中)～古墳(前)	13	瀬戸山Ⅱ	縄文(早・中・晚)、弥生(中・後) ～古墳(前)
2	岡津原Ⅰ	縄文(中)、弥生(中・後)	14	瀬戸山Ⅲ	弥生(後)～古墳(前)
3	岡津原Ⅱ	縄文(中)	15	吉岡原	縄文(中・晚)、弥生(後)～古墳(前)
4	岡津原Ⅳ	弥生(中)～古墳(前)	16	高田上ノ段	弥生(後)～古墳(中)
5	岡津原Ⅴ	古墳(中・後)	17	高田下ノ段	縄文(中・晚)、弥生(後)～古墳(後) 平安
6	向山	縄文(早)、弥生(中)	18	溝ノ口	縄文(中)、弥生(後)～古墳(前)
7	二反田	弥生(中)	19	今坂	弥生(後)～古墳(前)
8	女高Ⅰ	弥生(中)～古墳(前)	20	平田ヶ谷	縄文(中)、弥生(後)～古墳(前)
9	女高Ⅱ	縄文(晚)、弥生(後)～古墳(前)	21	林	弥生(後)～古墳(前)、中世
		奈良、平安	22	松ヶ谷	弥生(後)
10	高田	縄文(中)、弥生(後)～古墳(中)	23	山下	弥生(中)
11	花ノ腰	弥生(後)～古墳(前)			
12	瀬戸山Ⅰ	縄文(早・中)、弥生(後)～古墳(前)			

第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡分布図

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

岡津原Ⅲ遺跡が所在する岡津原は、原野谷川の左岸に形成された独立した河岸段丘で、東西500m、南北2kmの広さを測る。段丘面には縄文時代から古墳時代にかけての遺跡群が存在している。

緑茶生産量日本一を誇る掛川市では、市内全域に茶畠が営まれている。ほぼ平坦で広大な岡津原は茶栽培に適した土地で、全面に茶畠が広がる市内でも有数な茶處である。茶樹栽培では、改植の際に地表土と地山土を重機等で転換する「天地返し」と呼ばれる作業を行う。これまでに数多くの遺跡がそれによって消滅している。掛川市教育委員会では、こうした事態を避けるため遺跡地内の茶畠で茶樹改植が行われる際に、記録保存を目的とした発掘調査を実施している。

今回の調査は、平成8年6月19、20日に岡津原Ⅲ遺跡地内で携帯電話中継アンテナ設置工事に伴う現地立会調査に赴いたところ、本調査地点である茶畠で、抜根した茶樹を重機で掘られた穴の中で焼却しているのを見かけた。その穴の断面に溝状の遺構が確認できた。そのため、地権者である服部壽栄氏と連絡を取り、茶園の今後の改植計画を伺うとともに、遺跡発掘調査について説明をした。そこで、改植前の発掘調査実施について快諾を得たため、国・県の補助金を得て掛川市教育委員会が発掘調査を実施することになった。

2. 調査の方法と経過

今回の調査は、排土の場外処分ができなかつたため、調査区を半分ずつに分けて行った。まず、重機により耕作土の除去を行った。統いて人力による掘削作業を行った。調査区は1辺5m四方の区画を任意に設定した。設定した区画の南北線は、N-60°-Eである。調査では、この区画に従い遺構の検出・遺物の取り上げ・図面作成等を行った。また、区画を設定した杭を国家座標に拾い出す基準点測量とベンチマークを設定するための水準点測量を業者に委託した。

現地での図面は、遺構全体図については20分の1縮尺、遺物の出土状況の平面図等は10分の1縮尺で作成した。写真による記録は、プロニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒、同カラーリバーサル及び同カラーフィルム撮影によつた。また、業者に委託して、ラジコンヘリコプターによる完掘遺構の空中写真撮影を2回に分けて行った。調査の経過は、以下のとおりである。

- 平成8年7月30日～8月1日 前半部の重機による耕作土の除去。
7月30日～8月25日 人力による粗掘・遺構確認・遺構掘削・図面作成。
8月26日～8月29日 ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・完掘遺構写真撮影・遺構実測。
8月22日 基準点測量及び水準点測量。
9月2日～9月5日 前半部の重機による埋め戻し。後半部の耕作土の掘削。
9月4日～10月1日 人力による粗掘・遺構確認・遺構掘削・図面作成。
10月2日～10月8日 ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・完掘遺構写真撮影・遺構実測。発掘調査器材の片付け。

10月18日 現地説明会。
10月20日～10月22日 後半部の埋め戻し。調査地の整地。

3. 遺跡をめぐる環境

岡津原Ⅲ遺跡では、平成3年度と平成8年度にそれぞれ市道富部各和線の拡幅工事に先立つ発掘調査を実施している。調査成果については調査報告書が各々刊行されているので、ここでは概略を述べるにとどめる。また、岡津原での発掘調査の成果については、平成8年度調査報告書に記載したので省略する。

平成3年度の調査は、拡幅工事部分の西半分で行われた。弥生時代中期の方形周溝墓3基とそれに伴う溝7条、弥生時代中期後葉から後期の方形周溝墓の周溝の可能性のある溝を9条検出した。この中には、V字状の断面をした環濠の可能性のある溝も含まれている。出土遺物は弥生時代中期後半の白岩式土器が主であるが、中期前半の丸子式土器や後期の土器も出土した。また、縄文時代中期の土器片がピットから出土した。

平成8年度の調査では、弥生時代中期と考えられる方形周溝墓4基とそれに伴う溝10条、その他の溝4条とピットが数個検出された。出土土器はほとんどが小片で、時期の特定できるものはなかった。

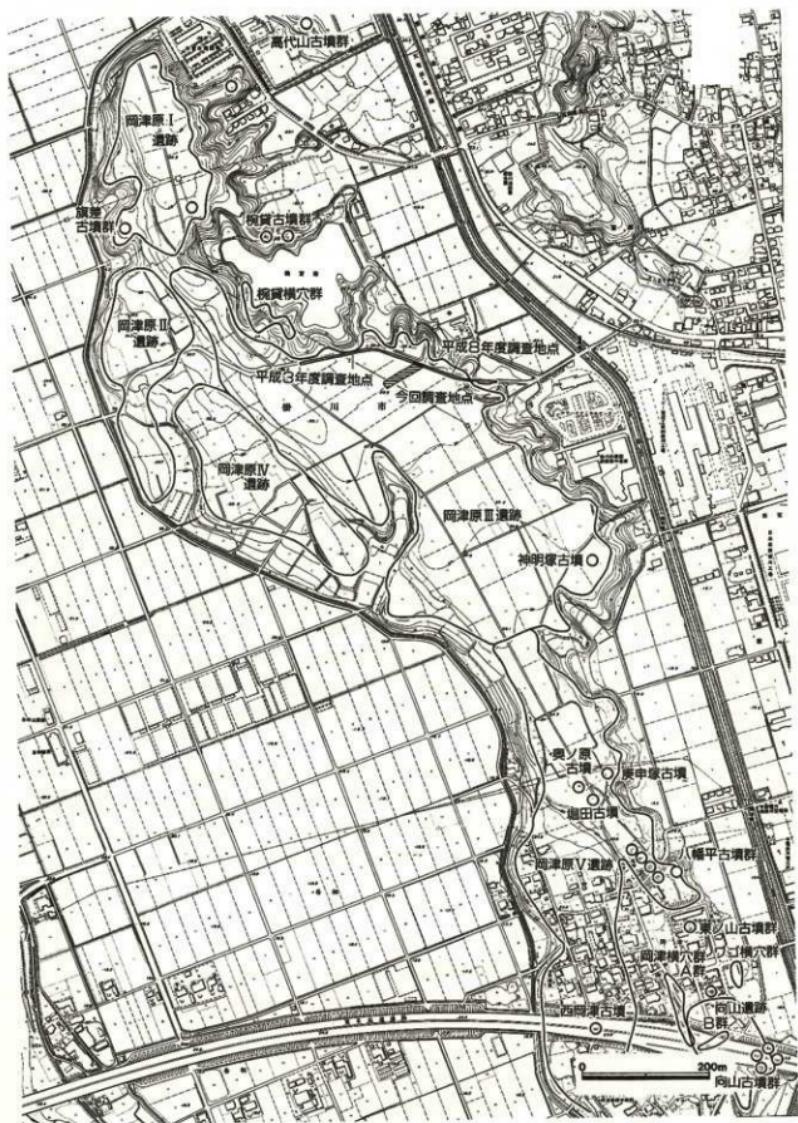
2つの調査成果を総合すると、弥生時代中期の方形周溝墓は7基検出された。その他の溝も方形周溝墓の周溝と仮定すると、弥生時代中期から後期にかけての方形周溝墓が東西約250mの広範囲に造築されていたと推定される。しかし、それぞれの方形周溝墓が検出された地点がかけ離れていることから、両地点の関係を把握するまでには至らなかった。

市内では、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓を数多く検出している。このうち岡津原Ⅲ遺跡と同じ弥生時代中期の方形周溝墓は13遺跡で確認されている。岡津原では、今回の調査地点から南東へ約1.3km離れた丘陵南辺の向山遺跡の発掘調査で、弥生時代中期後半の方形周溝墓が3基検出された。また、原野谷川右岸に立地する山下遺跡は、県内でも最古の弥生時代中期中葉の方形周溝墓群で、引き続き造られた後期のものも含めると29基検出された。これらは南北200mの範囲に整然と連なっている。

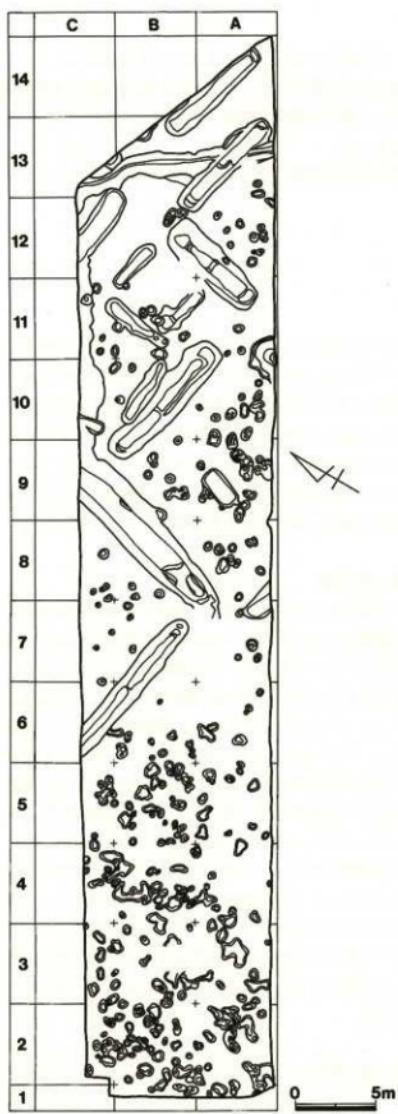
今回の調査で、岡津原Ⅲ遺跡では3回の発掘調査が行われた。3地点とも隣接しているために、方形周溝墓群の広がりを確認することができたが、岡津原全体の歴史的環境を復元するにはまだ資料不足である。今のところ、岡津原における発掘調査の件数・面積とともに、原野谷川対岸の和田岡原での調査例と比較すると少なく、全体を解明するには今後の調査例の増加を待つしかない。

《参考文献》

- (1) 掛川市教育委員会 「掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ」 1984
- (2) 掛川市教育委員会・袋井市教育委員会 「山下遺跡緊急発掘調査報告書」 1984
- (3) 掛川市教育委員会 「岡津原Ⅲ遺跡発掘調査報告書」 1992
- (4) 掛川市教育委員会他 「静岡県掛川市向山遺跡発掘調査の記録」 1994
- (5) 掛川市教育委員会 「岡津原Ⅲ遺跡緊急発掘調査報告書」 1997
- (6) 掛川市教育委員会 「神子地遺跡発掘調査報告書」 1997
- (7) 掛川市史編纂委員会 「掛川市史 上巻」 1997



第2図 遺跡周辺地形図



第3図 遺構全体図

II 調査の内容

今回の調査では、弥生時代中期後葉と考えられる方形周溝墓7基（うち1基は主体部を伴う）とそれらの周溝16条、縄文時代中期の小穴、時期不明の掘立柱建物1棟、溝状遺構2条、小穴、性格不明遺構を検出した。また、後半部重機掘削中に縄文時代中期の土器が出土したが、これに伴う遺構は確認することができなかった。

以下、方形周溝墓、掘立柱建物、縄文土器の出土状況を報告する。

1. 遺構

i 方形周溝墓

検出された7基の方形周溝墓の規模は大小様々である。平面形態からみると、確認できたものはすべて隅が切れるタイプである。配置は別々の方形周溝墓が1本の溝を共有する共有タイプ（1号と2号、3号と4号、4号と5号の各方形周溝墓）と相互に近接し溝が切り合い関係を持つ重複タイプ（2号と3号方形周溝墓）と相互に近接するが切り合い関係を持たない近接タイプ（4号と6号、5号と7号、6号と7号の各方形周溝墓）があり、バラエティーに富んでいる。これらの方形周溝墓のすべてから造墓時期のわかる土器は出土していないが、周溝から出土した弥生土器は、中期後半の白岩式土器に比定されるものである。以下、各方形周溝墓について説明する。

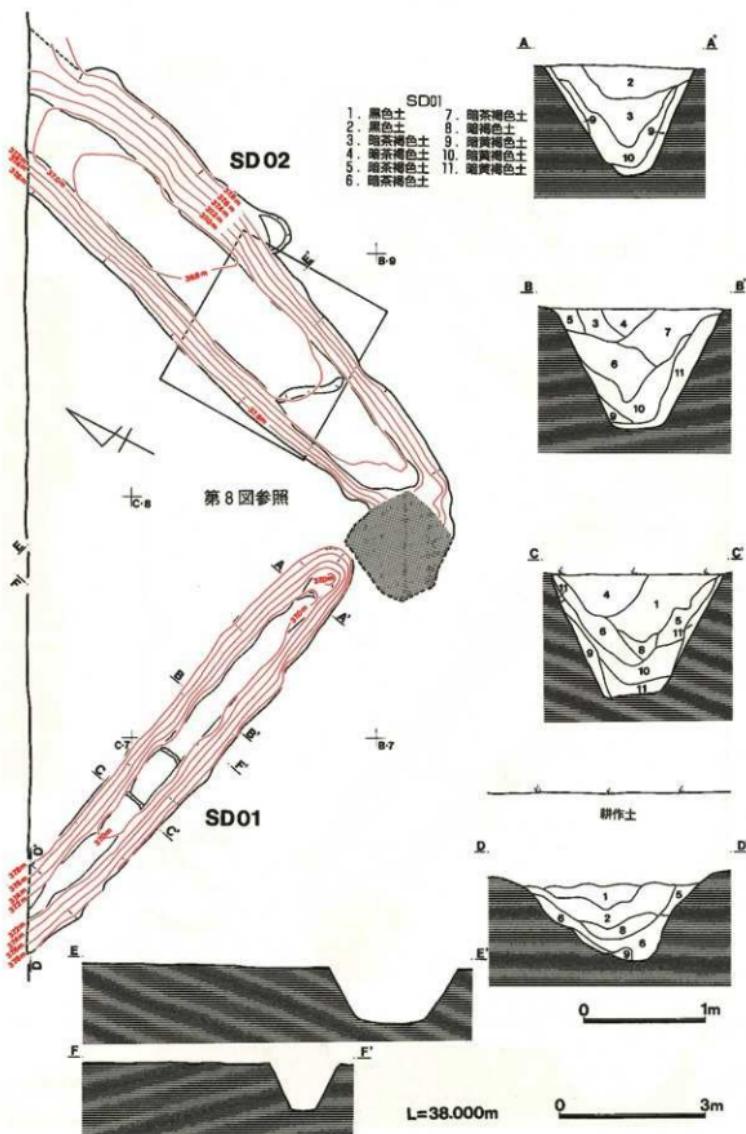
第1号方形周溝墓（第4図）

B—6区からC—9区において検出された。今回の調査で検出された7基の方形周溝墓の中でいちばん規模が大きいと推定される。SD01・02によって構成されるが、両溝とも調査区外へ伸びる。また、方台部は削平されている。そのため、方台部の規模は不明である。SD02の長軸方位はN—14°—Eである。南側溝のSD01は検出長981cm、幅165cm、深さ99cmを測る。溝底の幅は50cmと狭く、断面形状はV字状を呈し、立ち上がりは急である。東側溝のSD02は検出長12m10cm、幅300cm、深さ131cmを測る。溝の覆土は、上層がしまりのある黒色土、下層は地山の暗黄褐色土のブロックや粒子が混じる暗茶褐色土や暗褐色土である。SD02は2号方形周溝墓と共有する。

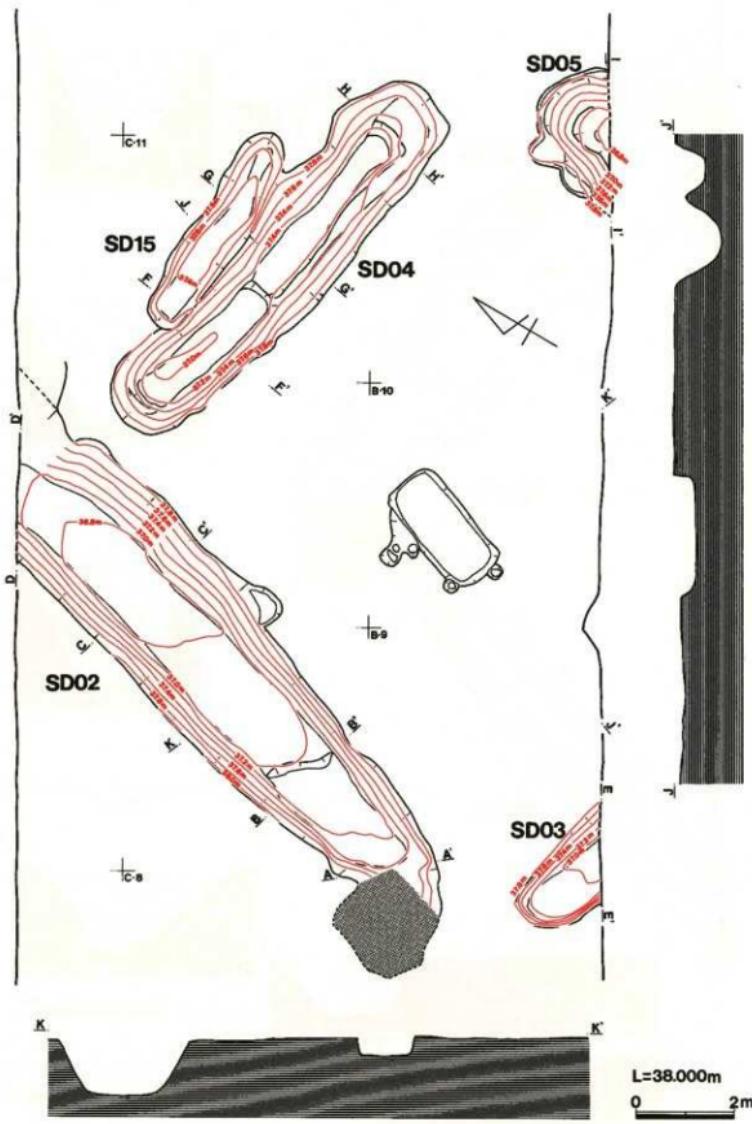
また、SD02の下層から第16図の44・45に図示した壺型土器が2点出土した（第8図参照）。これらは約150cmほど離れているが、溝底から約10cmほど浮いた状態にあり、出土レベルはほぼ同じである。44は肩部で頸部と胸部が折れているが直立した状態、45は倒れた状態ではあるが、いずれもほぼ完形で、一括廃棄されたというよりは供献されたものであると考えられる。2点の壺の形状が異なるため同時期の土器とは断言できない。しかし、出土状況から推測して土器が埋まったのはほぼ同時期であると考えられる。1号か2号の方形周溝墓のどちらかに供献された土器であるかは出土状況からはわからなかった。44の壺は白岩式土器の特徴を示しており、1号または2号墓の築造時期は弥生時代中期後半と考えられる。

第2号方形周溝墓（第5図）

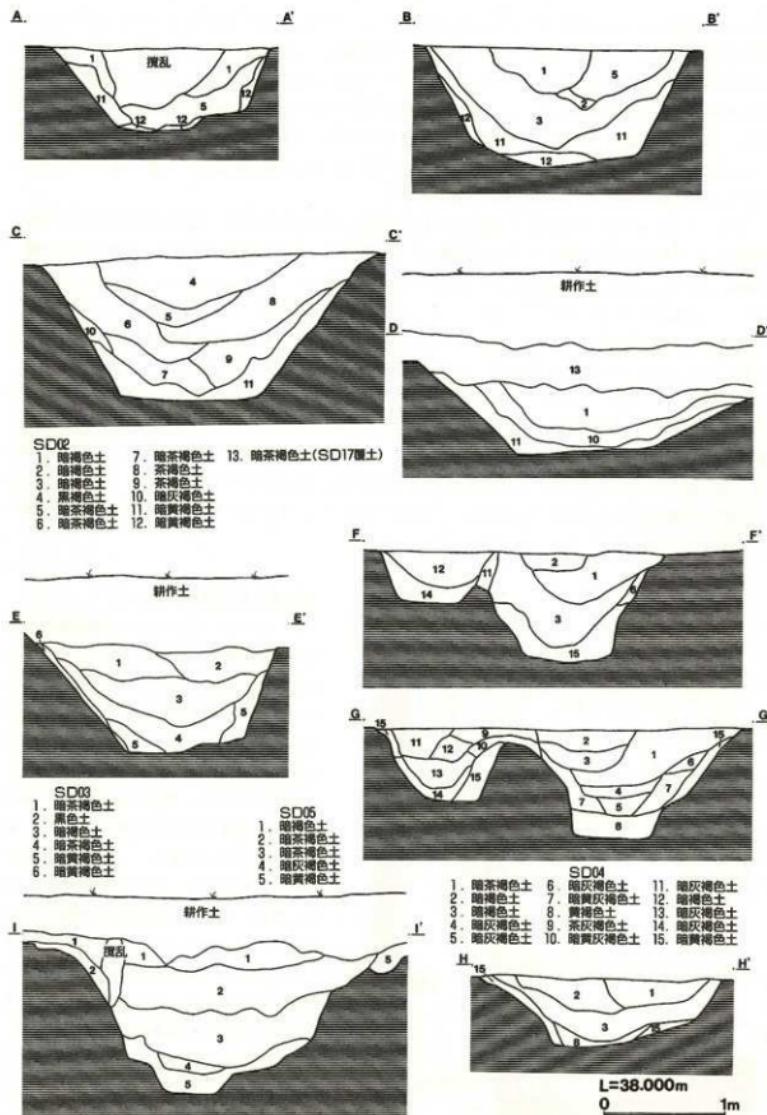
A—7区からB—11区において検出された。SD02・03・04・05で構成される。溝全体が検出できたのはSD04だけである。南側溝のSD03は検出長200cm、幅142cm、深さ90cm、北側溝のSD04は全



第4図 1号方形周溝墓実測図



第5図 2号方形周溝墓実測図



第6図 2号方形周溝基周溝土層断面図

長911cm、幅217cm (S D15を含むと321cm)、深さ90cm、東側溝のS D05は検出長166cm、幅200cm、深さ125cmを測る。S D02は前述したように1号方形周溝墓と共有する。しかし、S D02の立ち上がりは調査区外へつづいており、S D02と04の陸橋部は明確ではない。さらに、2号方形周溝墓を構成する他の溝よりも規模が大きく、1号方形周溝墓を構成するS D01とも規模が異なることから、再掘削して共有しているようにもとらえられる。方台部の規模は、南北長は不明であるが、東西長は推定で約11mを測る。南北軸はN-14°-Eである。周溝の覆土は上層に黒色土、下層に地山土のブロックが含まれる暗褐色土で、他の周溝とはほぼ同様である。

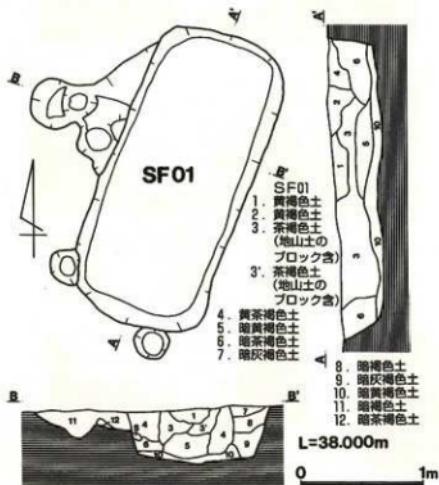
また、2号方形周溝墓からは、今回検出された7基の方形周溝墓で唯一主体部が検出された(第7図参照)。主体部は方台部中央よりやや西側に1基位置する。形状は長方形を呈し、長さ254cm、幅118cm、深さ46cmを測る。床面はほぼ平らで、木棺の木口板を立てたと思われる掘り方は確認できなかった。長軸方位はN-20°30'-Eで、2号方形周溝墓の南北軸よりもさらに東にずれている。

横断面の土層を観察すると大きく2つの層に分けられる。1~6層が木棺腐朽後に埋まった方形周溝墓の封土と考えられる土で、地山土と同じ暗褐色土やそのブロックが混ざった土である。さらに、その外側の7~9層は地山土とは異なる暗茶褐色土等で層状に堆積する。これらは埋葬時において木棺と主体部掘り方との間を埋めた土と考えられる。それから推測すると、木棺の幅は約60cmである。縦断面では横断面ほど明確にその違いは分からず、木棺の長さは推測できなかった。また、主体部内覆土を水洗・ふるい掛けしたが、副葬品は出土しなかった。仮にS D02から出土した土器が2号方形周溝墓に供獻されたものと考えるのなら、土器の出土地点は、主体部の東側のはば真横の位置にある。

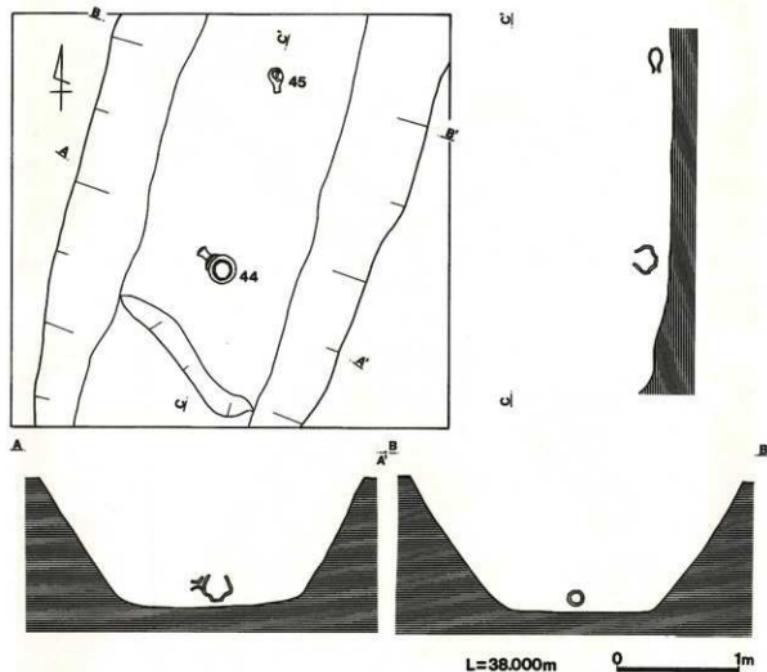
第3号方形周溝墓(第9図)

B・C-10・11区において検出された。

他の方形周溝墓と比較すると南北軸にずれが見られ、全体の中でも特異である。S D08・15・16で構成され、北側の溝は調査区外にあると思われる。東側溝のS D08は全長450cm、幅105cm、深さ70cm、南側溝のS D15は全長455cm、幅110cm(推定)、深さ63cm、西側溝のS D16は検出長166cm、幅80cm、深さ32cmを測る。S D08は4号方形周溝墓と共有する。S D15はS D04と切り合ひ関係にある。平面形態や土層断面の観察から、3号墓は2号墓よりも新しいと考えられる。S D16はS D17によってほとんど破壊されている。方台部の方位はほぼ北である。方台部の規模は南北長は不明で、東西長は約6.2mを測る。溝の覆土は、上層が暗褐色土、下層が地山土の粒子・ブロックを含む暗褐色土である。



第7図 2号方形周溝墓主体部実測図

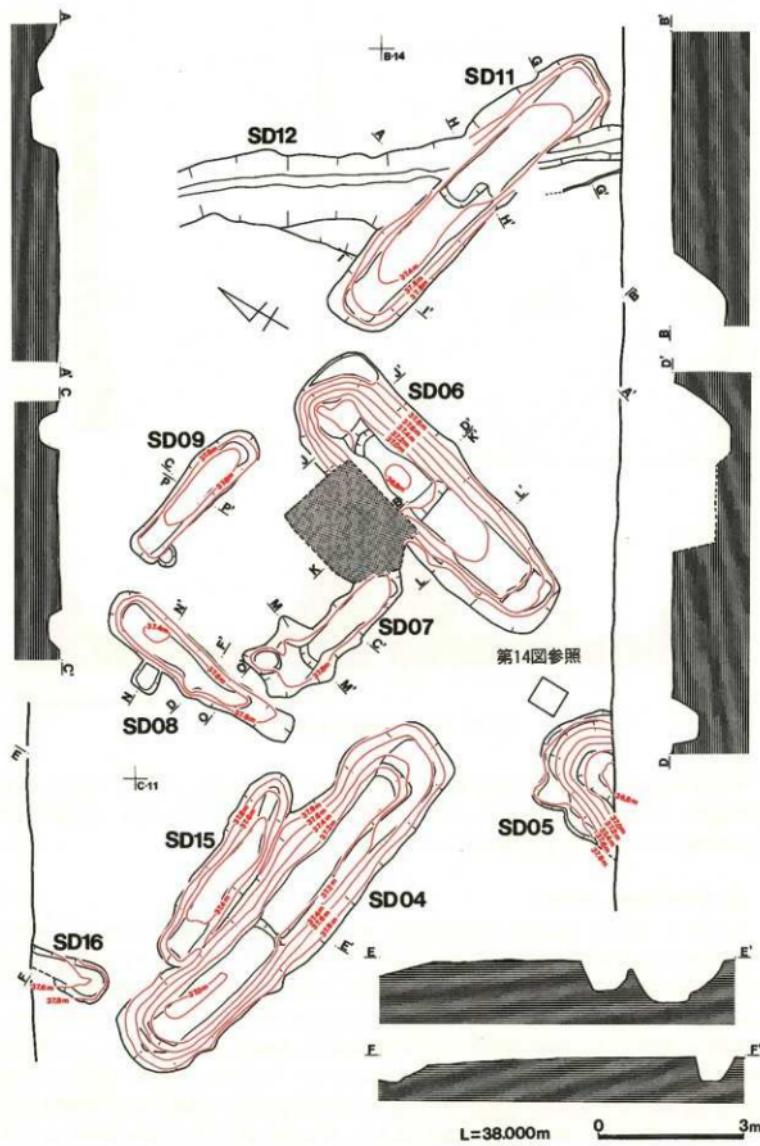


第8図 SD 02土器出土状況実測図

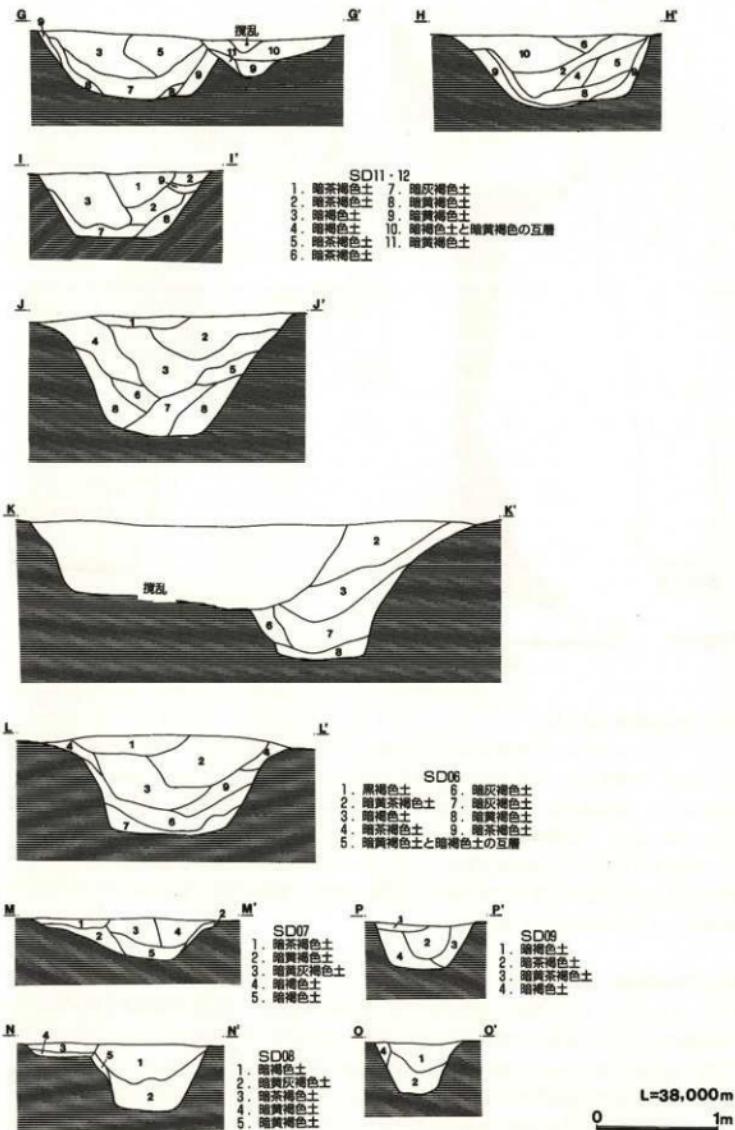
また、SD 08の中央よりやや北側の下層面から第16図の46に図示した完形の壺型土器が出土した(第10図参照)。これは溝底から約20cm浮いており、横倒しの状態である。これが3号墓・4号墓のいずれかに供獻された土器であるかは確認できなかった。

第4号方形周溝墓（第9図）

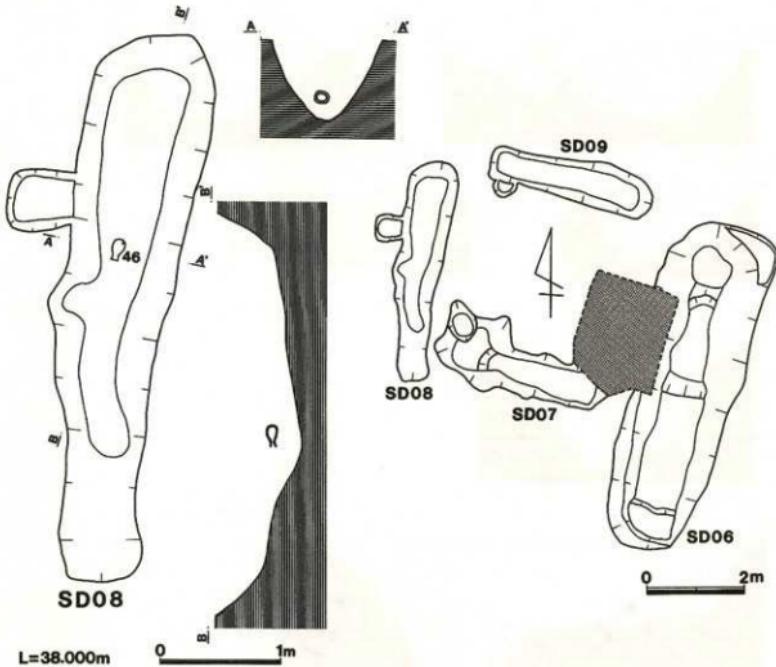
A・B・C・D—11・12区において検出された。唯一全容の分かる方形周溝墓ではあるが、検出された中ではいちばん規模が小さい。SD 06・07・08・09で構成される。SD 06は5号方形周溝墓と共に、構成する他の周溝と比較してひとまわり規模が大きい。東側溝のSD 07は西側の立ち上がりで擾乱を受けているが、全長684cm、幅221cm、深さ119cm、南側溝のSD 07は西側の立ち上がりで擾乱を受けているが、全長375cm、幅88cm、深さ34cm、北側溝のSD 09は全長340cm、幅98cm、深さ40cmを測る。方台部の規模は南北長約3.3m、東西長約4.4mを測る。南北軸はN—14°—Eである。方台部中央付近のレベルは、2号方形周溝墓の主体部の上場のレベルとほとんど同じであるが、主体部の掘り方は残存していなかった。SD 07・08・09は比較的浅い周溝であるが、覆土は他の溝と同様に上層は暗褐色土、下層は地山土の粒子を含む暗茶褐色土等である。



第9図 3・4・5号方形周溝墓実測図



第10図 3・4・5号方形周溝墓周溝土層断面図



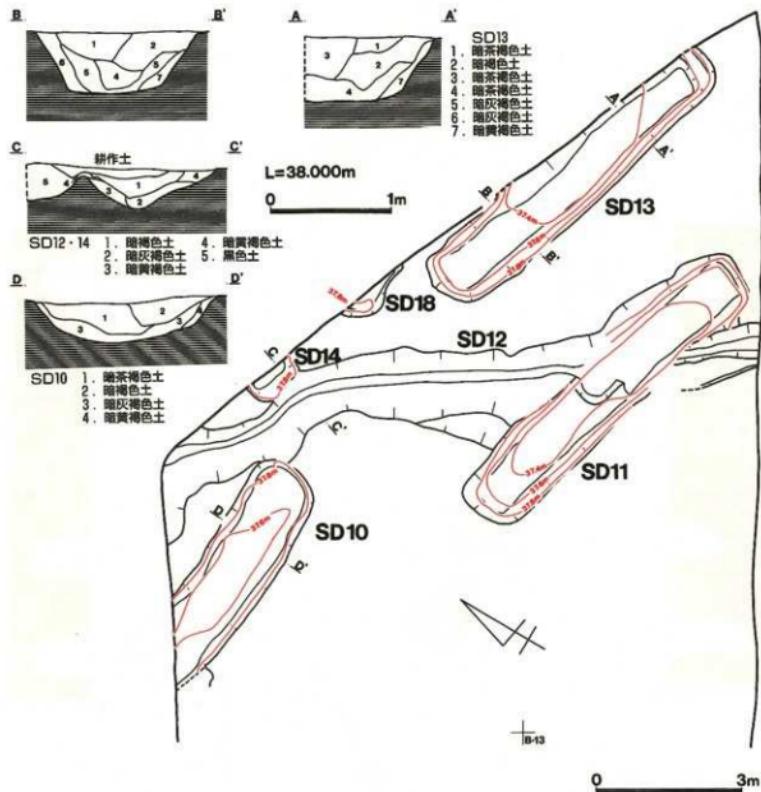
第11図 SD 08土器出土状況実測図

第5号方形周溝墓（第9図）

A・B—11から13区において検出された。SD 06・11によって構成される。南および東側の溝は調査区外である。西側溝のSD 06は4号方形周溝墓と共有する。北側溝のSD 11は、調査区を横断するSD 12によって一部破壊されているが、全長737cm、幅153cm、深さ61cmを測る。他の方形周溝墓とは共有しない溝である。方形周溝墓の約半分ほどしか検出していないため方台部の規模は不明である。SD 11の長軸方向に直交する軸を南北軸とすると、N=13° 30'—Eである。SD 11の覆土は、新旧関係のあるSD 12の覆土にしまりが見られないため、下層に一部暗褐色土が残存するのみである。造墓の時期を示す土器は出土していない。

第6号方形周溝墓（第12図）

B・C—12・13区において検出された。SD 10・14で構成される。北および西側溝は調査区外である。南側溝のSD 10は、調査区北壁に沿って検出されたSD 17で一部破壊を受けている。調査区外へ続くため、全容は不明であるが、検出長445cm、幅153cm、深さ38cmを測る。東側溝のSD 14は、そのほとんどが調査区外で、南側の立ち上がりはSD 12によって破壊を受けている。検出長52cm、幅115cm、深さ28cmを測る。方形周溝墓全体の規模は不明である。隣接地における平成8年度の発掘調査でSD 14につながると思われる溝を検出している。しかし、西側溝にあたる遺構は、平成3年度調査では確

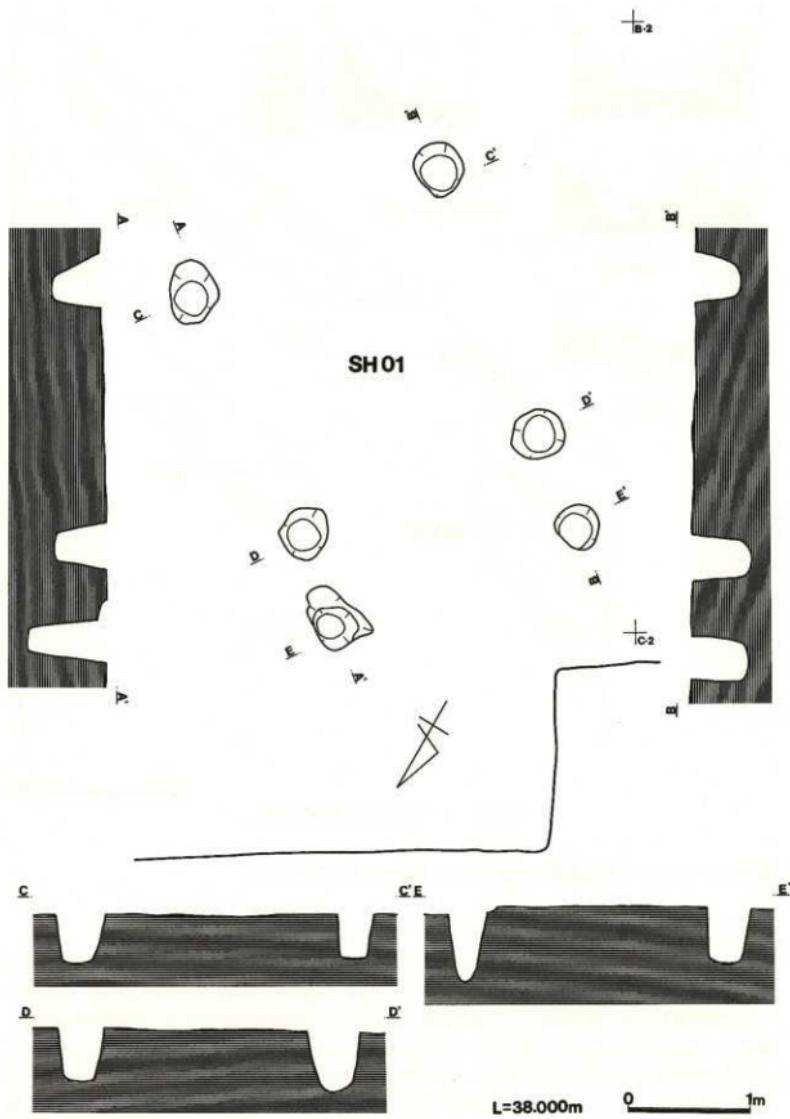


第12図 6・7号方形周溝墓実測図

記されていない。方形周溝墓の時期の分かれる遺物は出土しなかった。

第7号方形周溝墓（第12図）

A・B-13・14区において検出された。SD13・18で構成される。北および東側溝は調査区外である。南側溝のSD13は、一部が調査区外であるが、全長734cm、幅148cm、深さ60cmを測る。西側溝のSD18は検出長44cm、幅159cm、深さ15cmを測るが、ほとんどが調査区外である。6号方形周溝墓と同様に、平成8年度の調査で、SD18につながる溝および西側溝に相当するとと思われる溝を検出している。方形周溝墓の規模は不明である。方形周溝墓の時期の分かれる遺物は出土していない。なお、SD09と10、SD11と13の間は、方形周溝墓の溝は存在しない。この空間は幅約2mあり、岡津原の縁辺部に沿うように東西方向に存在する。方形周溝墓群内を通る墓道域と考えられる。



第13図 SH01実測図

ii その他の遺構

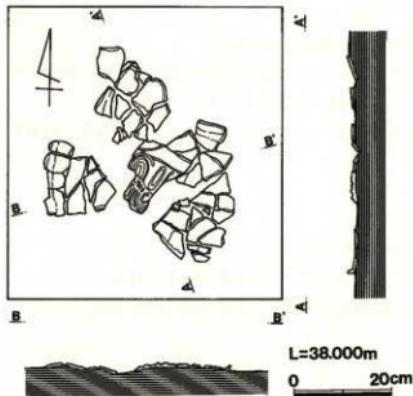
1) 掘立柱建物

S H01 (第13図)

調査区北西隅のB・C—2区において検出された。東西2間、南北1間で、規模は東西約3.6m、南北約2.6mを測る。長軸方位は、N—51°—Wである。東西方方向の西側1間分の柱穴間は、A—A'で23cm、B—B'で45cmと短い。他の柱穴間はA—A'で178cm、B—B'で182cm、C—C'で192cm、D—D'で168cm、E—E'で172cmを測り、ほぼ近似値である。柱穴の掘り方は、直径50cm程度の円形で、深さは確認面から38~65cmを測る。柱穴覆土はおおむね2層に分けられ、上層はしまりのある暗褐色土、下層は地山の暗黄褐色土のブロックの混じる暗茶褐色土である。柱穴からは遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

2) 繩文土器出土状況 (第14図)

A—11区において検出された。SD05の北側に位置する。重機掘削中に出土し、周辺の遺構精査を行ったが、土器に伴う遺構は確認できなかった。ちなみに耕作土の深さは約50cmである。出土したのは第15図の9・10に図示した縄文時代中期の深鉢型土器である。検出時は10の土器内面が上に向いていたため、9のみの1個体分であると思ったが、接合・復元により2個体分であることが分かった。2点とも口縁部から胴部にかけての破片で、底部片は確認できなかった。押しつぶされた状態ではあったが過去に改植などの擾乱を受けておらず、口縁部に貼付けられた粘土紐による装飾も良好に残存していた。



第14図 縄文土器出土状況実測図

2. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、ほとんどが土器である。出土遺物の総量はボリコンテナ(545×336×200)2箱で、調査面積からみても極めて少ない。後半部からの出土の方が多かった。今まで実施した岡津原Ⅲ遺跡の調査でも、面積が狭かったこともあるが、出土遺物の量は少なかった。出土土器の時期は、縄文時代中期と弥生時代中期後葉で、平成3年度の調査で出土した土器の時期と一致する。土器の割合は、圧倒的に縄文土器が多く、弥生土器は少ない。しかし、縄文土器は、方形周溝墓の周溝覆土内から出土したものもあり、遺構からの出土はわずかである。弥生土器はすべて方形周溝墓の周溝内から出土したものである。

1) 縄文土器

前述したように、今回の調査で出土した土器の大半は縄文時代中期に属するものである。その出土总数は約800点である。その中から部位のわかるもの、施文のあるものを抽出して報告する。これらは遺構に伴って出土したものが少ないため、土器の時期、形式、部位、施文方法をもとに次のように分類した。

I類土器 (1~5) 器厚が薄く、平行沈線による施文のものと縄文施文のものに分けられる。中期初頭に比定される。

II類土器 (6) 中期中葉から末に比定される土器で、在地的である。

III類土器 (7~43) 明確に該当する形式名を求めるのが困難な在地的な土器群で、中期後葉に比定される。部位と施文方法により、以下に細別した。

A. 口縁部 (7~18)

a. 縄文 (7) 縄文が施文されるもの。

b. 半裁竹管状工具 (8) 半裁竹管状工具により施文されたもの。

c. 肉彫 (9~12) 曾利式の影響を受けたもの。9・10は富士市天間沢遺跡に出土例が見られる。同遺跡報告書では「(仮称) 天間沢タイプ」と呼称している。

d. 無文 (13~18) 隆帯が貼付けられたものとないものに分けられる。15は口縁直下を窪ませる。

B. 胸部 (19~38)

a. 条線 (19~24) 半裁竹管状工具による条線が施文される。

b. 縄文 (25~28) 縄文のみが施文されるものと隆帯がつくものに分けられる。

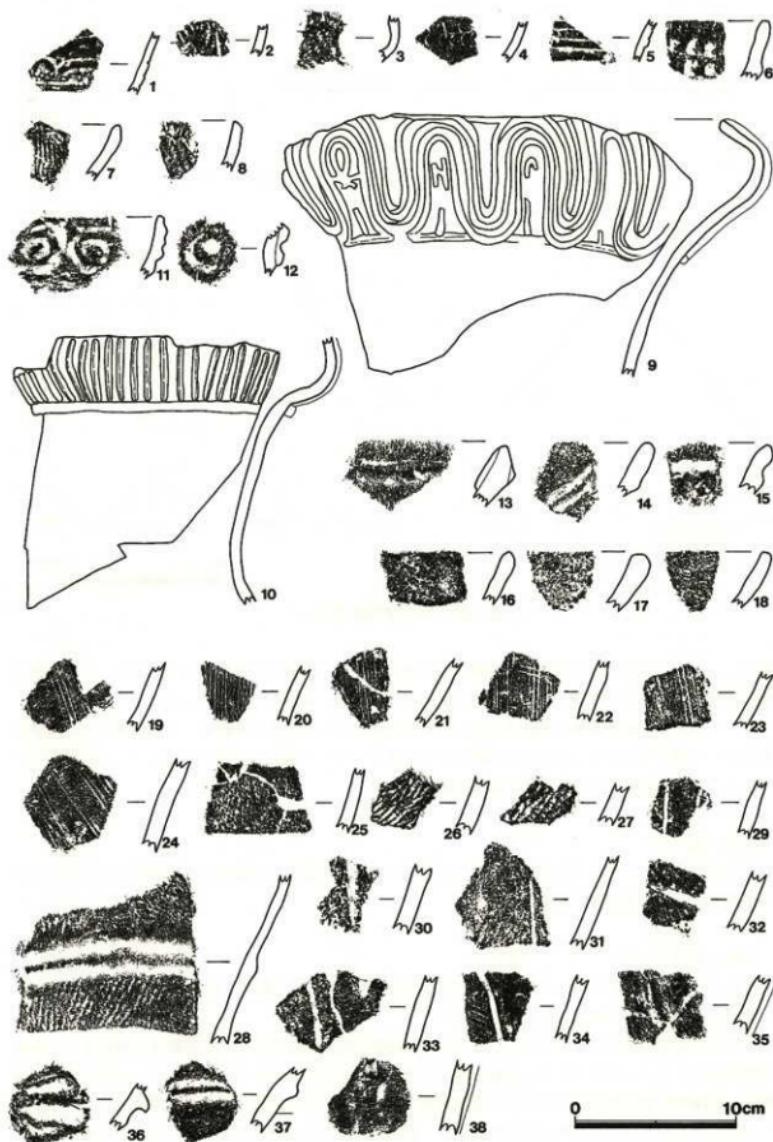
c. 沈線 (29~34) 半裁竹管状工具による沈線のみの施文と沈線と磨消縄文が施文されるものに分けられる。

d. 隆帯 (35~38) 隆帯を貼付けたもの。

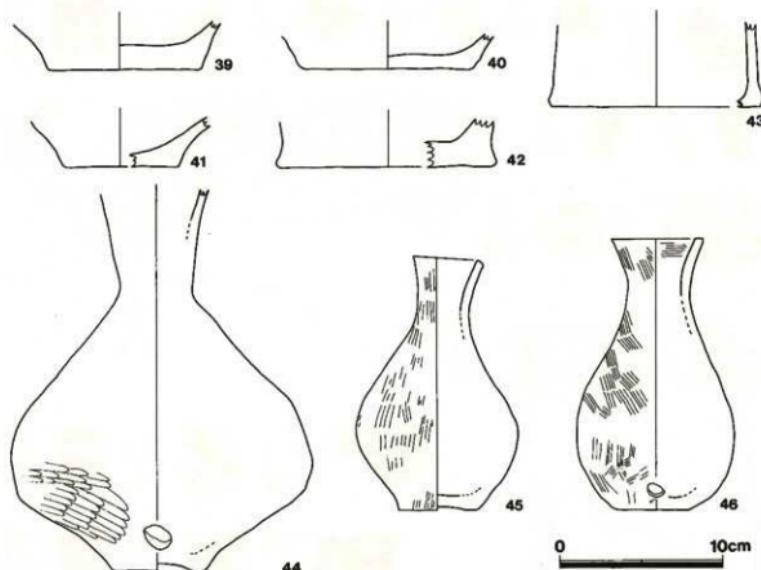
C. 底部 (39~43)

I類土器 (1~5)

1~3はB-9区のS P 253からの出土である。1は深鉢の口縁部に近い部位の破片で、器面に沈



第15図 出土遺物実測図(1)



第16図 出土遺物実測図(2)

線や印刻が施される。2も深鉢の口縁部に近い部位の破片で、繩文と沈線が施文される。3は深鉢の橋状把手で器面に繩文が施される。中期初頭の五領ヶ台式に属すると考えられる。

4・5は中期初頭の五領ヶ台式でも新しい段階に属するものと考えられる。4は口縁に近い部位の破片で、半裁竹管状工具による2段の押引き文を施す。5も口縁に近い部位の破片で、半裁竹管状工具による平行沈線とそれを区画する刻みが施される。

II 類土器 (6)

6は半裁竹管状工具による連続刺突文を2段施す。中期の勝坂式と併行する時期のものと考えられる。施文方法に在地的特色を示す。

III 類土器 (7~43)

7はA-9区のS P 205から出土した。波状口縁を呈し、器面に繩文を施文する。8は口縁部端面に刻目を施す。直下に繩文(?)が施される。

9と10は重機掘削中に出土した。9は口縁部文様帯に粘土紐を貼り付けて褶曲文を構成する。口縁部断面はキャリバー状を呈する。胴部は無文である。10は口縁端部を欠損する。9と同様に口縁部文様帯に直線状に粘土紐を貼り付ける。胴部が無文であることが天間沢タイプとは異なる。

11は粘土を貼り付けて肉彫り状に装飾する。曾利式に見られる特徴である。12は11と同様に粘土貼り付けによる装飾を施す。口縁部の把手片である。

13はA—11区のS P 230から出土した。内外面を粘土貼付けにより肥厚させて断面形状が三角形の隆帯をつける。14は口縁端面に対して斜めに低い隆帯がつく。15は口縁部片で口縁直下を窪める。16～18はいずれも無文の口縁部片である。胎土や色調が異なることからそれぞれ別個体であろう。16はB—9・10区のS P 268から出土した。

19～24は半裁竹管状工具による条線を施す。19と20は同一または同様の破片であろう。

25～28は縄文が施文される。28はA—8区のS P 193から出土した。一条の隆帯がつき、その下に縄文が施される。また、全体にススが付着する。

29～34は半裁竹管状工具による沈線が施される。30と33・34は沈線により区画し、磨消縄文が施される。32は明確に沈線とは言い切れないがこの類に含めた。

35～38は隆帯がつく。36は隆帯直上に沈線が施される。

39～43は底部である。いずれも平底状を呈し、無文である。39はB—11区のS P 233からの出土である。43は垂直気味に立ち上がり、器壁は薄い。

2) 弥生土器

弥生土器は、第8図と第11図の出土状況を示した3点の完形の壺型土器が出土している。これらの土器の時期は、弥生時代中期後葉の白岩式に比定される。この他には明らかに弥生土器と判別できる土器は出土しなかった。

44・45はS D 02からの出土である。44は細頸の特徴から典型的な白岩式土器の壺であるといえる。口縁部を欠損する。残存高23.4cmを測る。頸部から胴上半部にかけては器面が荒く調整は不明であるが、胴下半部から底部にかけてはミガキが施される。また、底部付近に穿孔が施される。底面は上底状を呈する。45は小型の壺で、器高15.5cmを測る。やや外反する単純口縁を成し、胴部中央付近に最大径をもつ。底面は若干上底状を呈する。全面に縱方向のハケメを施す。穿孔は施されない。

46はS D 08からの出土である。小型の壺で、器高16.5cmを測る。外反する単純口縁を成し、胴部は球胴状を呈する。底部の立ち上がりは不明瞭で、明確な底面を呈しない。全面に斜位方向のハケメを施す。底部付近に穿孔が施される。

以上が今回出土した土器である。平成3年度の調査では縄文土器はわずか2点出土しただけであった。縄文土器の出土量は調査前の予想を上回り、縄文時代中期初頭から既に岡津原において人々が生活していたことが明らかとなった。また、数は少なかったが弥生土器も方形周溝墓の周溝からほぼ完形で出土し、土器の供獻の様子を知る上で貴重な成果が得られたといえよう。

III まとめ

岡津原Ⅲ遺跡地内における発掘調査は今回の調査で3次目になる。広い遺跡範囲内のほんの一部を発掘したにすぎないが、隣接した地点を調査することができた。今までの調査成果を追認したこと、あるいは今回の調査により新たに得られた成果をまとめてみた。

1. 方形周溝墓のあり方について

今までに調査した地点は、岡津原の北面した段丘縁辺に沿う形であった。明らかに方形周溝墓のものと思われる溝は、調査した地点の両際で検出された。両地点は直線距離で約170m離れている。その間には、等間隔でほぼ平行に位置する溝状遺構を13本検出している。これらの溝については、調査区外に続くため陸橋部分を検出できなかつたことと断面形状がV字状を呈した環濠の可能性のある溝や幅が2m以上の溝であったため、平成8年度発掘調査報告書では方形周溝墓の周溝とは異なるものと推測した。それ故に、両地点で検出された方形周溝墓群は、同時期の可能性はあると考えたものの、それぞれ別な方形周溝墓群が存在していたと位置づけた。

今回は平成8年度調査地点から岡津原の丘陵中心部へ向かう発掘区域を調査した。方形周溝墓群の広がりとそれに伴う集落跡が検出されるのではないかと調査前に期待した。調査の結果、住居跡などは検出されなかつたが、方形周溝墓群の広がりについては明らかになった。

方形周溝墓群の広がりをみると、調査区周辺の地形から推測して、縁辺部に近い6・7号墓より外側には存在しないと思われる。また、1・2号墓より丘陵中心部にかけては造墓されていない。これらのことから方形周溝墓群は、段丘縁辺部に沿つて3列にわたり造られていたことがわかつた。さらに、今回の調査で方形周溝墓の周溝に断面がV字状を呈した溝や幅2m以上の溝が検出されたことで、今までの調査で検出した同様の溝についても方形周溝墓の周溝である可能性は高いと思われる。

以上のことから、途中遺構の稀薄なところがあり、後期の土器が出土した溝も含まれるが、岡津原Ⅲ遺跡地内における方形周溝墓のあり方は、少なくとも丘陵縁辺の幅約40m、長さ約250mの範囲に重列するように分布していると推測される。

2. 方形周溝墓の群構成と造墓の変遷について

今回の調査では7基の方形周溝墓が検出された。検出基数自体が少なく、全容が不明なものが多いが、規模、配置、方位などの特徴から4つの群に分けられる。いずれも1~2基を1つの群単位とする。

I群 1号墓・2号墓

周溝の長さが10m近くある大型の方形周溝墓群。

II群 3号墓・4号墓

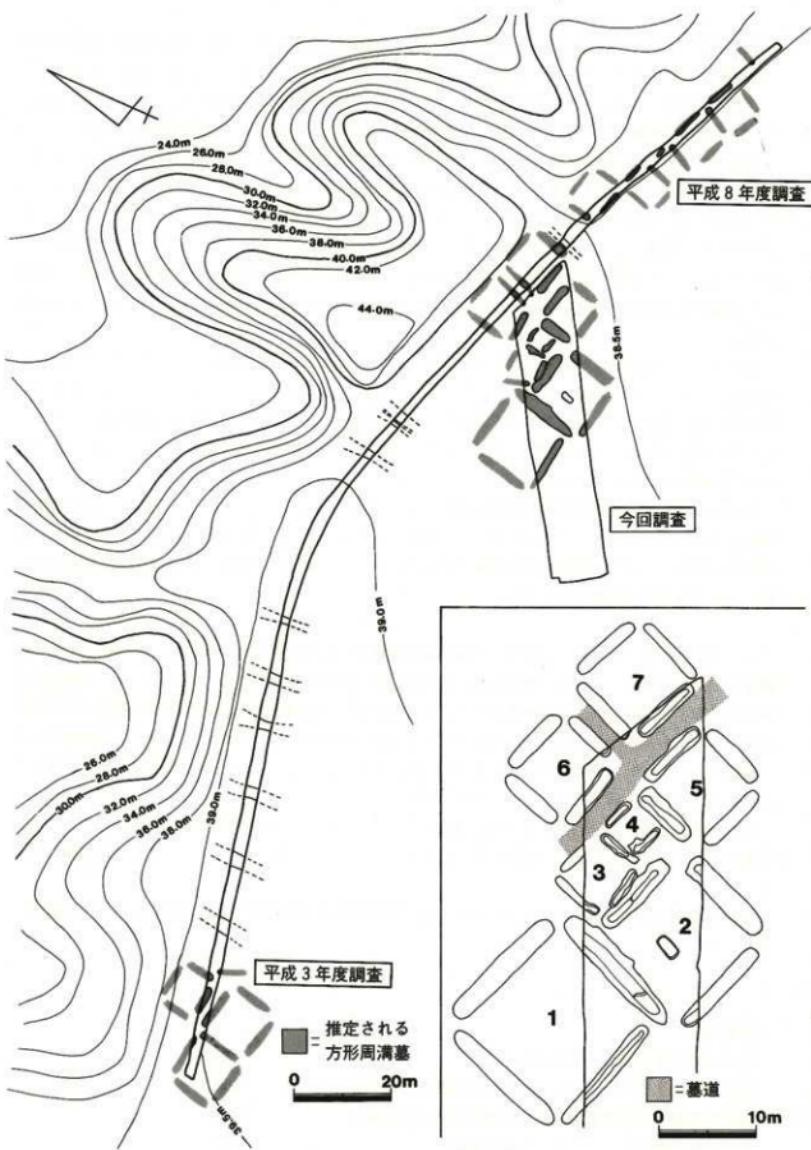
周溝の長さが5m以下の小型の方形周溝墓群。3号墓と4号墓とは溝を共有しているが、主軸方位にずれがみられる。

III群 5号墓

6・7号墓と同規模の方形周溝墓であるが、間に墓道が通るため別群とした。

IV群 6・7号墓

I群とII群の中間の規模の方形周溝墓群。隣り合うが溝を共有しない近接タイプの配置である。



第17図 方形周溝墓群構成図

次にそれぞれの群の特徴について検討する。なお、造墓の変遷を追うのは時期の分かる土器がすべての周溝から出土していないので困難である。そこで周溝の形態から造墓の変遷を考察してみた。

I群の1号墓、2号墓はSD02を共有する共有タイプの配置である。遺構のところで前述したように、SD02は再掘削された可能性が高く、造墓順は2号墓→1号墓という変遷が推測される。

II群の3号墓、4号墓は規模が小さいが、共有するSD08から穿孔のある供獻土器が出土している。3号墓は他の方形周溝墓と比較すると主軸方位がずれている。本文中で述べたように、SD15とSD04との切り合い関係はSD15が勝っているため、3号墓が2号墓より新しいと思われる。しかし、SD04を大きく破壊することなく造られており、北側には墓道域が存在するため、限られた狭い空間に無理矢理造墓した印象を受け、造墓に何らかの規制が働いていたのではないかと推察できる。3号墓と4号墓の新旧関係は不明である。しかし、SD08が共有する溝となるので、短い時間差であると思われる。

III群の5号墓は群分けの基準に示したように、6・7号墓と同一規模と推定される。特にSD11と13は長さ・幅・深さの数値は近似し、形状も似ている。そのため同一群ととらえることもできるが、同規模の溝を共有せずに近接タイプで造墓すること、共有しないのはその間に墓道域が存在するからであると考えられることから別群とした。群構成を推察する上で墓道域は無視できず、造墓に際しての規制が働いていると考えられる。

IV群は6号墓、7号墓は今回の調査ではわずかな部分しか検出していないが、平成8年度の調査で検出した溝とつながるものであると判断して復元してみた。隣り合うが溝を別々につくる近接タイプの配置である。ほぼ同一規模の方形周溝墓ではないかと思われる。丘陵縁辺という立地に恵まれている。6・7号墓の造墓順はわからない。

1、2とまとめてみたが、群構成は今回の調査で検出された方形周溝墓についての分類であり、前回までの調査で検出された方形周溝墓は、わずかな部分しか検出されていないため、この分類基準をあてはめることは難しい。方形周溝墓のあり方も前回までの調査区の屈曲する部分が遺構の空白域にあたり、そこを境に大きく東西で2群に分けられるようにも思える。これだけ大規模な方形周溝墓群が検出されたことで、弥生時代中期の集落跡のありが気になる。この時期の集落域と墓域は離れていたと考えられるため、その所在は今のところ不明である。

また、縄文土器の多量の出土により、縄文時代中期初頭から人々の生活の痕跡が確認できた。中期後葉の土器も出土し、縄文時代中期を通じて生活していたことが伺える。しかし、遺構は不明瞭であった。

今回の調査でも分からなかった点については、解明されなければならない課題とし、今後の調査に期待したい。

〈参考文献〉

- | | | |
|---------------|-----------------------|------|
| 富士市教育委員会 | 『天間沢遺跡Ⅱ』 | 1985 |
| 袋井市教育委員会 | 『昭和60年度国庫補助事業発掘調査報告書』 | 1986 |
| 静岡県埋蔵文化財調査研究所 | 『能島遺跡(本文編)』 | 1989 |
| 袋井市教育委員会 | 『宇佐八幡境内遺跡』 | 1992 |

図 版

図版 I



前半部完掘状況（空中写真）



後半部完掘状況（空中写真）

図版Ⅱ



調査前全景（南西から）



重機稼働風景



作業風景

図版 III



1・2・3・4号方形周溝墓完掘状況（北から）



2号方形周溝墓完掘状況（北から）



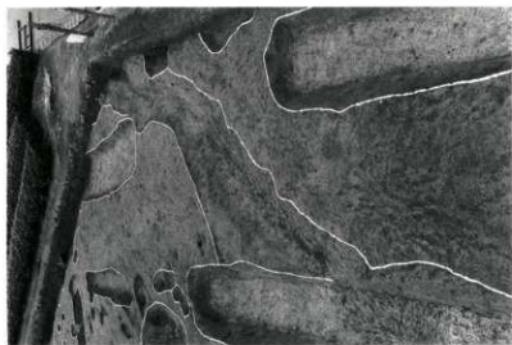
3号方形周溝墓完掘状況（東から）



3・4号方形周溝墓完掘状況（東から）



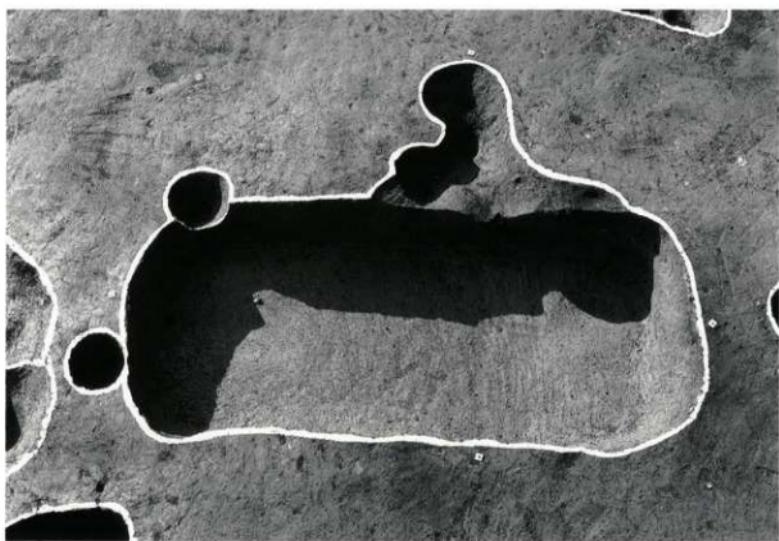
5号方形周溝墓完掘状況（北西から）



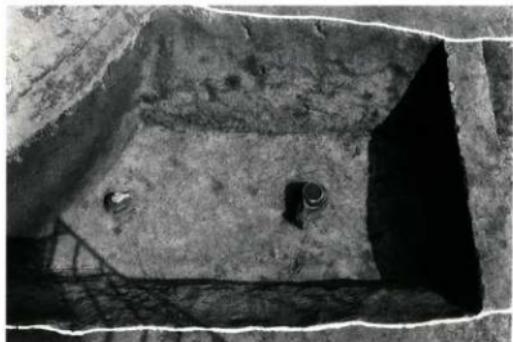
6・7号方形周溝墓完掘及び墓道確認状況（東から）



2号方形周溝墓主体部土層断面（北から）



2号方形周溝墓主体部完掘状況（東から）



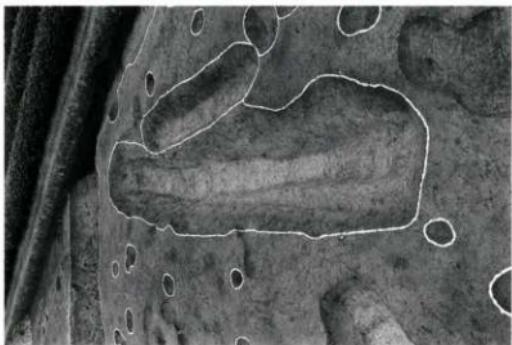
S D02土器出土状況（西から）



S D02土器出土状況微細（北から）



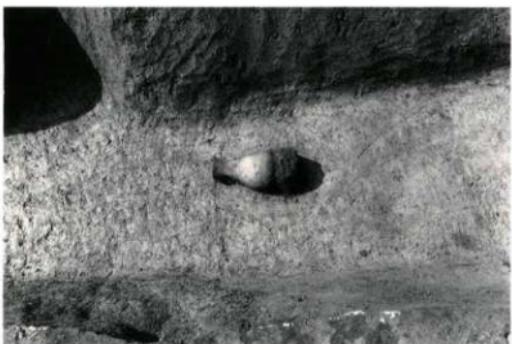
S D02土器出土状況微細（南から）



S D 04・05完掘状況（西から）

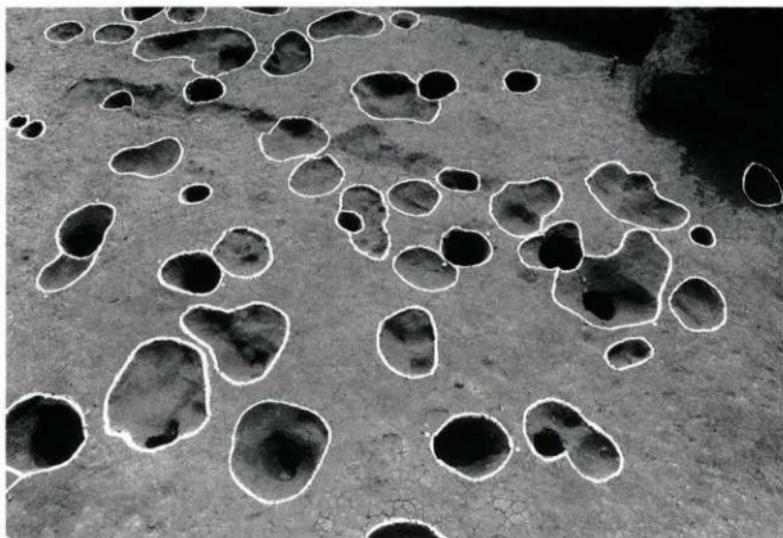


S D 08土器出土状況（南から）



S D 08土器出土状況微細（東から）

図版
VIII



S H01完掘状況（東から）



縄文土器出土状況（北東から）

図版
IX



9



10



39



1



2



3



15



11



12



6



7

図版 X



8



4



5



13



14



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28

図版
XI



44



45



46

報告書抄録

ふりがな	おかつかはらさんいせき							
書名	岡津原Ⅲ遺跡							
副書名	平成9年度茶園改植に伴う発掘調査報告書							
編著者名	村松弘規							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL (0537)21-1158							
発行年月日	西暦 1998年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コ一ド		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査因
おかつかはらさんいせき 岡津原Ⅲ遺跡	しづおかけんかつけわくし 静岡県掛川市 おかつかはらさんいせき 岡津字旗差 591-1	市町村	遺跡番号	34度 46分 29秒	135度 58分 08秒	19970730 ～ 19980325	800m ²	個人所有の茶園改植
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
岡津原Ⅲ遺跡	散布地	縄文時代中期 弥生時代中期 後半 時代不明	ピット 方形周溝墓7基 及び周溝16条 掘立柱建物、溝 ピット	縄文土器 弥生土器				

岡津原Ⅲ遺跡
発掘調査報告書

1998年3月25日

編集発行 掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701-1
TEL (0537)21-1158

印 刷 株式会社 彩光堂
静岡県掛川市宮脇248-1
TEL (0537)24-0013

